

今週の為替相場見通し(2018年2月13日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.05 ~ 110.29	108.80	107.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.2206 ~ 1.2475	1.2253	1.2000 ~ 1.2300
(1ユーロ=)	(円)		131.99 ~ 137.15	133.33	131.00 ~ 134.50
英ポンド	(ドル)		1.3764 ~ 1.4150	1.3826	1.3600 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	148.93 ~ 155.67	150.49	147.00 ~ 151.00
豪ドル	(ドル)		0.7759 ~ 0.7954	0.7815	0.7700 ~ 0.7900
(1豪ドル=)	(円)	*	84.01 ~ 87.51	85.01	83.50 ~ 86.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 岡本 明生

(1) 今週の予想レンジ: 107.00 ~ 110.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

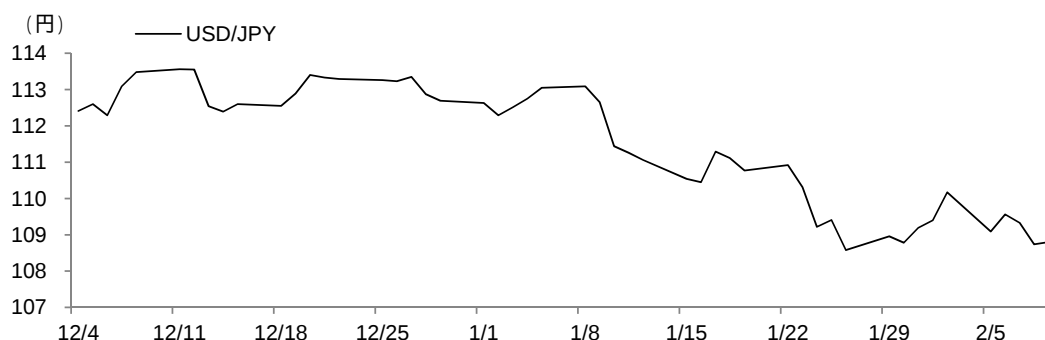
先週のドル/円相場は上下に激しい値動きとなった。週初5日に110円台前半でオープンしたドル/円は、一時週高値となる110.29円をつけたが、前週末の大幅な米国株安を受けて日経平均株価が大きく値を下げる動きに109円台後半まで下落。米1月ISM非製造業景気指数が予想を上回ると日中高値近辺まで回復する場面が見られたものの、軟調に寄り付いたNYダウ平均が一時1500ドル超まで下げ幅を拡大し、VIX指数がギリシャ危機の水準まで急上昇する動きにドル/円は109円を割り込んだ。翌6日も日経平均株価が暴落し、米金利も大幅に低下する中、ドル/円は一時108.46円をつけたが、株価が下げ幅を縮小すると109円台を回復。その後もドル買いの流れが続き109円台半ばまで上昇した。7日は大幅高で寄り付いた日経平均株価が上げ幅を拡大する中でも上値重く、次第に上げ幅を削る動きとなるとドル/円は109円近辺まで軟化した。その後は、米上院指導部が超党派の合意成立を発表し、政府閉鎖が回避される見通しになったことなどを背景に109円台後半まで買い戻されたが、上昇していたNYダウ平均がマイナス圏に沈む展開に109円台前半まで反落。8日は日経平均株価が上昇したことや中国が2年ほど停止していた海外投資の枠組みを再開したとの報道にドルが買われ109円台後半まで値を戻した。しかしその後は、NYダウ平均が再び大幅安となる中で円買いが強まり108円台半ば近辺まで急落。9日は大幅安で日経平均株価が寄り付いたものの、ドル/円は徐々に持ち直して109円台を回復。その後政府が黒田日銀総裁の再任決定との報道もあって109.32円まで上昇したが、米株安・金利上昇の展開を受けてドル/円は週安値108.05円まで下落。しかし、引けにかけて米株が反発すると持ち直し、108.80円で越週した。

今週は、引続き値動きの荒い展開を予想する。1月安値の108.28円を下回る水準まで下落したが、108円近辺では確りとしたドル買い意欲も見られたため、108円割れは簡単ではないだろう。しかし、まだロスカットできていない市場参加者もいると見られる中、株がやや戻した水準では再び売り込まれるリスクもあり、相場が落ち着きを取り戻すには時間がかかるだろう。今次株安ショックの発端が強い米雇用統計だったことから、今週は14日(水)の米1月消費者物価指数(CPI)に警戒が必要だろう。一段とインフレ率が高まるようだと米金利上昇を嫌気して各市場の調整が入りやすく、その場合にはドル/円が107円台に突入することも視野に入れておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

安値 108.05 円 高値 110.29 円 終値 108.80 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2300 131.00 ~ 134.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下落した。週初5日、1.24台半ばで取引を開始したユーロ/ドルはユーロ圏12月小売売上高(前月比)が予想に届かない一方で米1月ISM非製造業景況指数が予想対比良好な結果となったことで1.23台後半まで下落。6日、ユーロ/円の下落に連れ安となったことでユーロ/ドルは一時1.2314まで続落するも、米株が下げ渋ったことから1.2405まで反発。7日、ダドリーNY連銀総裁が「株式市場が下落したからといって見通しは変わっていない」とタカ派な発言をしたことからドル買い優勢の展開となりユーロ/ドルは1.22台後半まで下落。8日、英中銀で開催された金融政策決定会合が予想よりもタカ派な結果となったことから対ユーロでポンド買いの流れとなり、ユーロ/ドルは1.2212まで続落。しかしその後、プラートECB理事が「QE終了が近づくにつれ、『相当期間』を具体的に表現する必要が生じる」と発言したことで1.22台後半まで反発した。9日、米格付け会社が米国の債務拡大を受けて長期的に格下げ圧力がかかるとの見解を示したことなどを背景としたユーロ/円の下落にユーロ/ドルは連れ安となり、週最安値1.2206まで下落。1.22台半ばで越週した。ユーロ/円は5日、137円付近で取引を開始するも米株が大幅に下落したことで円全面高の展開に6日には134.00円まで下落。7日、135円台半ばまで反発したものの、ドル買い優勢の展開にユーロが軟調推移となったことでユーロ/円は133.84円まで反落。9日には週最安値131.99円まで下落し、133円台前半で越週した。

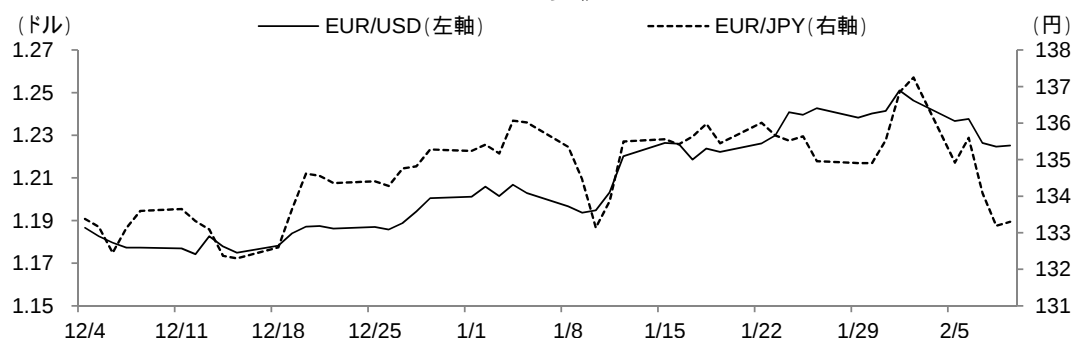
今週のユーロ相場は軟調推移を予想する。先週はプラートECB理事がフォワードガイダンスの文言を修正する可能性を述べたことでユーロは買われる場面も見られた。しかし市場はECBが長期的にはテーバリングを実施することをすでに織り込んでいる可能性が高く、この発言による反応は一時的なものに留まると考える。むしろ現状、まずは3月4日に予定されているイタリアでの総選挙が不安材料だろう。ポピュリズム政党である5つ星運動の躍進が見込まれる中、政治不安からユーロには下押し圧力がかかろう。また、先週前半にVIXが急騰した局面では通貨オプション市場のユーロ/ドル3Mリスクリバーサルはユーロコールオーバーからユーロプットオーバーに転換しており、向こう3ヶ月に関しては先安感が強くなっている。先週はリスクオフの展開からユーロ相場は軟調推移となったが、VIXが高止まりしている中では今週も同様の展開になる可能性が高いと考え、ユーロ相場は軟調な値動きが続くだろう。今週の重要指標としては14日(水)にユーロ圏12月鉱工業生産とユーロ圏10月～12月期GDP(2次速報)、15日(木)にユーロ圏12月貿易収支の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5～2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2206 高値 1.2475 終値 1.2253

(対円) 安値 131.99 高値 137.15 終値 133.33



(資料) ブルームバーク

3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3600 ~ 1.3900 147.00 ~ 151.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、軟調推移が先行。英中銀による早期利上げ示唆などを受けて反発する局面も見られたが、対ドル、対円では、結局安値で週の取引を終えた。金融市場全般の関心は、この間、株価動向とりわけ米株の乱高下に集まっていた。5日の暴落を皮切りに米株は乱高下したが、米株の急落に連れた世界的な株安が「リスク回避」の文脈で円高圧力を供給し、ポンド/円を押し下げることによって一定のポンド売り圧力につながった可能性は考えられた。週の滑り出しのポンド軟調は、30日の英中銀カーニー総裁による「積極的な利上げ」を示唆する発言によって俄かに上昇した値動きの調整的な側面もあったことだろう。その意味でも、8日の英中銀金融政策委員会や四半期インフレ報告書の発表に対する注目も大きかった。同委員会は、予想通り基準金利を0.50%に据え置いたものの、インフレ報告書のGDP成長率予想や経済予想の前提となる基準金利推移の上方修正などが「利上げは従来の予想以上に前倒し、かつ急速になる」と読まれ、ポンドの上昇を誘った。しかし、ポンド上昇は小幅、かつ一時的にとどまり、ほどなく、概ね元の水準まで反落した。その後、方向感なく推移したポンドだが、9日、週引けを前に、対ドル、対円でそれぞれ直近安値を割り込み、もう一段水準を切り下げて週の取引を終えた。ポンドが安値を更新する局面では、同日予定されたEUと英の離脱交渉で、英側が提示するはずだった離脱条件案が「予定の食い違い」で提示されなかったことを、ポンド売り要因視することもできただろう。

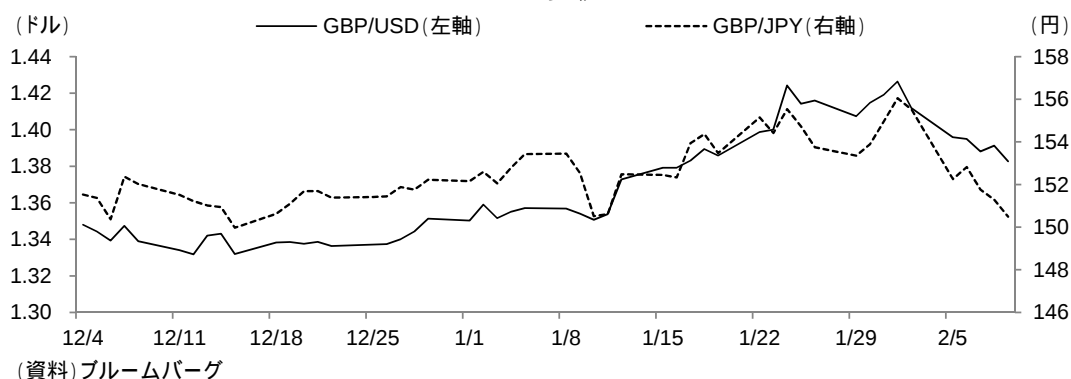
今週の英ポンド相場は、もう一段の下押しを予想。金融市場の注目は、引き続き米株や米国債(米長期金利)の動向に集まっているものと見込むが、仮に足元下落が水準調整に過ぎないと考えとしても、現在までに調整が一巡し早々に反発に向かうと見込むのは楽観が過ぎるように感じられる。良くてみ合い、悪ければもう一段の下落を見込むのが妥当なところではないか。ポンド続落を見込むのも、単純に足元軟調の継続を見込むのが一番大きい。ポンド続落見通しを裏付ける要因としては、英中銀の早期/大幅利上げ見通しに十分な説得力が感じられないのと、英のEU離脱交渉に進展が期待できないことが挙げられる。上述の通り英中銀は2月インフレ報告書で英成長見通しを上方修正したが、その要因は「世界経済の上振れにある」としていた。足元株価の動揺は、その「世界経済上振れ」に大きな不透明感が漂い始めていることを示唆するのではないか。現在の状況は、2015年7月に中国株の急落が鮮明になる中、カーニー総裁が「年末には利上げの是非が明確になる」と、拙速な利上げ予告をした時に共通する。また、EU離脱交渉に関しても、9日に行われるはずだった英側の具体的提案が延期されたのは「予定の食い違い=デイベス離脱相の出席が適わなかったこと」が原因と説明されたが、「英政府内で具体案の取りまとめが間に合わなかった」との見方を払拭するのは難しい。取りも直さず、「メイ首相が閣内の離脱派と反離脱派の意見調整をつけられない=掌握力がない」との観測を強める要因と言える。英経済指標では、13日(火)の英1月CPI、16日(金)の英1月小売売上高など主要マクロ経済指標が並ぶ。インフレ報告書が早期/大幅利上げ観測を煽った直後だけに、とりわけ物価動向(特にコアCPI)は興味深いものの、数字ひとつで相場つきが変わるほど、通貨市場が身構えている可能性は低いと見る。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3764 高値 1.4150 終値 1.3826

(対円) 安値 148.93 高値 155.67 終値 150.49



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部シドニー支店 山口 美紀

(1) 今週の予想レンジ: 0.7700 ~ 0.7900 83.50 ~ 86.50 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、0.79ドル台から約1か月ぶり安値となる0.7759まで下落。5日、豪ドルは0.79近辺でオープン。前週末の大幅な米国株安を受けて、アジア・オセアニア株が大きく値を下げるなどリスクオフの動きが継続し、豪ドルは0.79台前半で軟調推移。米国市場の引けにかけてNYダウ平均が一時1500ドル超まで下げ幅を拡大し、VIX指数がギリシャ危機の水準まで急上昇する動きに、豪ドルは0.79を割り込んだ。6日も世界的に株価軟調の動きが継続。更に豪12月小売売上高(季節調整値)が前月比0.5%減と市場予想0.2%減を下回ると、豪ドルは0.78台半ばに下落した。また、同日に今年初の豪準備銀行(RBA)理事会が開かれたものの、市場予想通り政策金利が16会合連続で1.50%に据え置かれたため、豪ドルへの影響は限定的だった。7日、米10年債入札が不調だったことから、米10年債利回りは2.83%と約4年ぶりの高水準まで上昇(債券価格は下落)し、米ドル買いが進行する中、豪ドルは0.78台前半に下落した。8日、ロウRBA総裁は講演にて「目先の利上げを支持する強い根拠は無い」との発言をし、豪ドルは上値重く推移。その後、米株が大幅安となりリスクオフの動きが拡がると、豪ドルは一時0.78を割り込む展開となった。9日には一時約1か月ぶりの安値となる0.7759をつけたが、その後は0.77台後半を中心に揉み合い推移した。先週の豪ドル円は87円近辺から84円台へ大幅に下落した。5日、豪ドル円は87円近辺でオープン。NYダウ平均が一時1500ドル超まで下げ、ドル円が110円台から109円台に急落すると、豪ドル円も連れ安となり86円近辺まで下落した。6日、豪ドルは下落する一方、ドル円が小幅に反発したため、豪ドル円は86円台半ばに値を戻した。翌7日は豪ドルの下落を主因に、豪ドル円は85円台半ばに下落した。8日、ロウRBA総裁のハト派(金融引き締めに対し消極的)なコメントを受けた豪ドル下落と、NYダウ平均の大幅安を背景としたドル円の下落が相俟って、豪ドル円は84円台後半まで下落。9日も軟調な動きは続き、豪ドル円は約7か月ぶり安値となる84.01円をつけた。

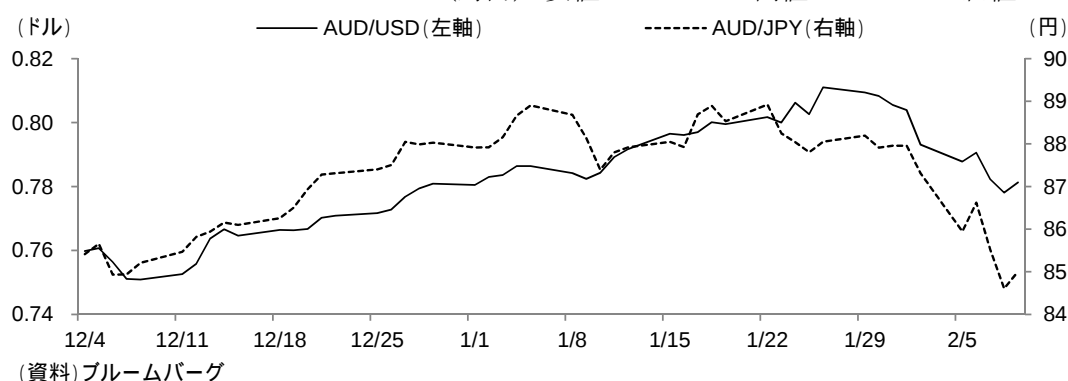
今週の豪ドルは横ばいを予想する。先週の豪ドルは約1か月ぶり安値となる0.7759をつけた。下落の主な要因は、米株を中心とした世界的な株価下落を受けたリスクオフの動きと、米債利回り急上昇を受けたドル買いと考えている。前者は、先週米株式相場は大きく揺れ動いたが、金曜日の米株主要3指数が揃って上昇して週を終えたことで、市場にやや安心感が広がりつつあると見る。一方、米債利回りの上昇は継続している。米10年債利回りは、2月2日に2.86%を付けた後、先週米株の急落を背景に2.65%に急低下したが、再び2.85%台に浮上している。深刻な財政赤字を背景に、米国債の最上級格付けに引き下げ方向の圧力に晒されている旨、格付け会社が指摘したこと等を勘案すると、引き続き米債利回りは上昇懸念があると考ええる。以上のことから、リスクオフの動き軽減による豪ドル売り圧力の弱まりと、米債利回り上昇を背景とした米ドル買いが相殺され、今週の豪ドルは0.78台を中心にした横ばいを予想する。また、今週は以下経済指標を注目している。14日(水):豪1月NAB企業信頼感・米1月消費者物価指数、15日(木):豪1月雇用統計、16日(金):ロウRBA総裁講演・米1月新築住宅販売件数。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7759 高値 0.7954 終値 0.7815

(対円) 安値 84.01 高値 87.51 終値 85.01



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。